

「アブラハムの出発」

(創世記12:1-6)

挽地茂男

2020.7.5 日本基督教団千歳丘教会創立記念礼拝

何事にも始まりがありますが、千歳丘教会のホームページには教会の始まりの頃の写真が載っています。まだオリーブの木が小さく、教会も完成間近かか完成後間もない頃で、壁が真っ白です。わたしが千歳丘教会に赴任した頃には、ホームページの「教会のご案内」の欄に、教会の写真とともに十時先生が書かれた、千歳丘教会の創立に関する二つの文章が掲載されていました。どちらも創立記念日礼拝当日の週報に掲載された文章です。この文章は、わたしたちの教会の歩みに大切な意味を持っていますので、読ませて頂きます。

【教会創立記念日…2008年7月6日の週報より】 千歳丘教会は1956年7月1日に最初の礼拝を行い伝道の開始をしました。最初は経堂子供の家幼稚園〔園長山中朋次郎〕のホールで、次に十時牧師宅、現在地には石井薫さんの土地建物の提供を受けて1972年クリスマス礼拝から集会を始め、2006

年会堂建築を行いました。今年は創立52年ですが、現在の地に移ってからは、35回目の記念日に当たります。

7月第1主日に記念礼拝を行っていますが、創立以来讃美歌7番を歌います。その歌詞が教会の最初からの祈りであるからです。

新会堂が出来てから会堂内外の整備や集会案内のポスター掲示その他の事務など信徒の手によって行われています。

近くコピー機を購入し週報印刷も教会で行うことにしました。第2代牧師を迎えるようなこと



になっても教会独自の体制が整っていることが大切です。それは外面的なことだけでなく、教会の信仰の確立と向上の問題です。「今持っているものを固く守れ」と言われた ティアティラ の教会（黙示録2:25）のように歩みたいと思います。 十時 英二

わたしたちの「教会独自の体制が整っていることが大切です。それは外面的なことだけでなく、教会の信仰の確立と向上の問題で

す。」①教会独自の体制の整備、と②教会の信仰の確立と向上がどれほど達成されてきたのかを真摯に省ると同時に、これらのヴィジョンをわたしたちのヴィジョンとして受け継いでいかなければなりません。教会は神さまが与えて下さるヴィジョンを、牧師も含めた信じる者たち全員のヴィジョンとして達成する所です。祈りを重ねなければなりません。今年も恵みに支えられて、創立64周年を迎えました。さらに1年、祈りと努力を重ねていきたいと思ひます。

アブラハムはイスラエルの民俗と信仰の始まりと言われます。しかしアブラハムの信仰を始まりとする宗教は3つあると言われます。いずれも旧約聖書を基礎にしていって「アブラハムの子どもたち」(Children of Abraham)と呼ばれる3つの一神教です。もうおわかりだと思ひますが、ユダヤ教とキリスト教とイスラーム(教)がそれです。この3つの宗教で現在の世

界の宗教人口の55.7%を占めています。アブラハムの信仰が、どれほど宗教の生命につながる根本的性質つまり宗教的普遍性を持っているかを反映しています。

イスラエルの民族と信仰の始祖とされるアブラハムとその子孫は、その子イサクもまたイサクの子ヤコブも小



家畜を飼育する**遊牧民／半遊牧民**〔遊牧民をさす「ハビル」が「ヘブル」(ヘブライ)人の語源だとする説がある〕の族長(部族の長)でした。イスラエル宗教は、これらの族長の宗教がもっていた遊牧的な性格をとどめています。つまり、まず彼らの宗教が定住者の宗教ではなく、「**旅する者**」の宗教であったということ。さらに、牧草を求めて移動を繰り返す彼らの神が「アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神」と呼ばれているのは、族長たちの神が、土地の神様や神殿

Children of Abraham	ユダヤ教=旧約聖書+タルムード
	キリスト教=旧約聖書+新約聖書
	イスラーム=旧約(新約)聖書+クルアーン

に結びつく神ではなく、部族の長である人格に結びつく神であったということを示しています。この伝統は旧約以来長く残っていて、使徒言行録にはこんな言葉があります。17章24節。「この神は天地の主ですから、手で造った神殿などにはお住みになりません」(使徒17:24)。預言者のみならず主イエスまで、神殿の腐敗を非難されるのはこの伝統につながっているからです。神殿を絶対化し、神殿を人間の欲望を達成する場所にすることは許されないのです。

やがてこの神との人格的な関係は、「契約」という形を取るようになります。もう少しわかりやすく言うと「神との指切りげんまん」という形を取ります。神との契約は、何か文字のたくさん並んだ冷たい契約書にサインするような事務的な手続きではないのです。神は、アブラハムとの間に、カナン

(現在のパレスチナ)の地を与えるという契約、いわゆる「アブラハム契約」を結ばれたのでした。

主なる神はこのような言葉でアブラハムを導き出されました。当時はまだアブラムと呼ばれて



いました。創世記12章1－3節。

「12:1 主はアブラムに言われた。

『あなたは生まれ故郷／父の家を離れて／わたしが示す地に行きなさい。12:2 わたしはあなたを大いなる国民にし／あなたを祝福し、あなたの名を高める／祝福の源となるように。12:3 あなたを祝福する人をわたしは祝福し／あなたを呪う者をわたしは呪う。地上の氏族はすべて／あなたによって祝福に入る。』」

さあアブ(ラ)ハムの出発です。

ですが、この出発の一步は、実は、長い時間をかけて準備されてきました。アブ(ラ)ハムの系図を遡りましょう。ノアまで遡って、ノアから下ってアブラハムに至る系図を見ておきましょう。ノアの洪水は、悪に満ちた地上世界に対する神の審きでした(6:1-9:29)。しか





し箱舟によって救われて、再び地上に戻ったノアと息子たちに神はこう言われます。創世記 9 章 1 節。

「創9:1 神はノアと彼の息子たちを祝福して言われた。『産めよ、増えよ、地に満ちよ』。」その息子たちの名が 9 章 18 節に現れます。「創9:18 箱舟から出たノアの息子は、セム、ハム、ヤフェトであった。ハムはカナン之父である。9:19 この三人がノアの息子で、全世界の人々は彼らから出て広がったのである。」つまり、ノアの息子たちのセム、ハム、ヤファトから世界の諸民族が再生し、このセムの家系の 10 代目にアブラ(ハ)ムが現れるのです。

10 章はそのノアの子孫たちの系図です。この系図の特徴は末代に向かって増え広がっていく拡散的性格をもっていることです。民族が世界に徐々に広がっていく過程を示します。ノアから 3 人の息

子たちが生まれ、その 3 人の息子たちそれぞれから、多くの子どもたちが生まれ、また、その子どもたちから多くの子孫が生まれます。一人から多数の子孫へと、一から多、一から多へと代々続いて末広がりに——つまり世界に拡散的に——増え広がっていく様子を描きます。

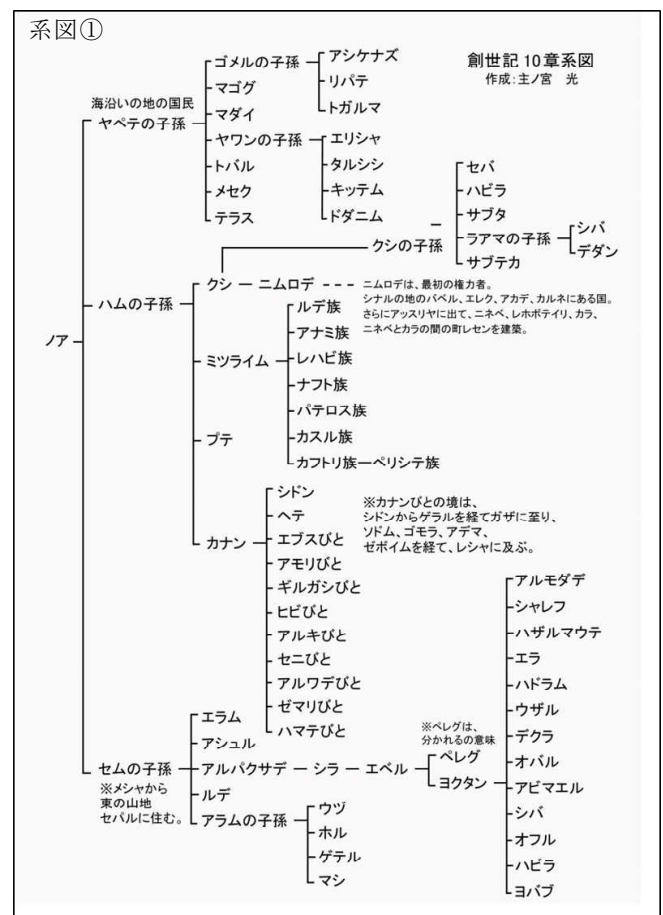
まずヤフェトの子孫が列挙されます。10 章 2 – 5 節。「10:2 ヤフェトの子孫はゴメル、マゴグ、メディア、ヤワン、トバル、メシェク、ティラスであった。10:3 ゴメルの子孫は、アシュケナズ、リファト、トガルマであった。10:4 ヤワンの子孫は、エリシャ、タルシシュ、キティム、ロダニムであった。10:5 海沿いの国々は、彼らから出て、それぞれの地に、その言語、氏族、民族に従って住むようになった。」



次いで**ハムの子孫**が記されます。10章6－20節。「10:6 ハムの子孫は、クシュ、エジプト、プト、カナンであった。10:7 クシュの子孫はセバ、ハビラ、サブタ、ラマ、サブテカであり、ラマの子孫はシェバとデダンであった。10:8 クシュにはまた、ニムロドが生まれた。ニムロドは地上で最初の勇士となった。10:9 彼は、主の御前に勇敢な狩人であり、『主の御前に勇敢な狩人ニムロドのようだ』という言い方がある。10:10 彼の王国の主な町は、バベル、ウルク、アッカドであり、それらはすべてシンアルの地にあった。10:11 彼はその地方からアッシリアに進み、ニネベ、レホボト・イル、カラ、10:12 レセンを建てた。レセンはニネベとカラとの間にある、非常に大きな町であった。10:13 エジプトにはリディア人、アナミム人、レハビム人、ナフトヒム人、10:14 上エジプト人、カスルヒム人、カフトル人が生まれた。このカフトル人からペリシテ人が出た。10:15 カナンには長男シドンとヘト、10:16 また、エブス人、アモリ人、ギルガシ人、10:17 ヒビ人、アルキ人、シニ人、

10:18 アルワド人、ツェマリ人、ハマト人が生まれた。その後、カナン人の諸氏族が広がった。10:19 カナン人の領土は、シドンから南下してゲラルを経てガザまでを含み、更に、ソドム、ゴモラ、アドマ、ツェボイムを経てラシャまでを含んだ。10:20 これらが、氏族、言語、地域、民族ごとにまとめたハムの子孫である。」

そしてセムの子孫が続きます。
10章21－31節。「10:22 セムの子孫はエラム、アシュル、アルパクシャド、ルド、アラムであった（5人）。10:23 アラムの子



孫は、ウツ、フル、ゲテル、マシュであった。10:24 **アルパクシャド**には**シェラ**が生まれ（**1人**）、**シェラ**には**エベル**が生まれた（**1人**）。10:25 **エベル**には二人の息子が生まれた。ひとりの名は、その時代に土地が分けられた（**パラグ**）ので、**ペレグ**といい、その兄弟は**ヨクタン**といった（**2人**）。10:26 **ヨクタン**には、**アルモダド**、**シェレフ**、**ハツアルマベト**、**イエラ**、10:27 **ハドラム**、**ウザル**、**ディクラ**、10:28 **オバル**、**アビマエル**、**シェバ**、10:29 **オフィル**、**ハビラ**、**ヨバブ**が生まれた。これらは皆、**ヨクタン**の息子であった（**13人**）。10:30 彼らは**メシャ**から**セファル**に至る東の高原地帯に住んでいた。10:31 これらが、氏族、言語、地域、民族ごとにまとめた**セム**の子孫である。10:32 **ノア**の子孫である諸氏族を、民族ごとの系図にまとめると以上のようなになる。地上の諸民族は洪水の後、彼



らから分かれ出た。」

しかしここに記されたセムの系図(①参照)にはセムからアブラ(ハ)ムに至る10代のうち5代目のペレグまでは書かれていますが、6代目以降は書かれていません。こうして10章が終わり、11章に入ると「バベルの塔」の物語(11:1-9)が始まります。実は、「バベルの塔」の物語が終わると再びセムの系図(②参照)が現れてきます。セムからアブラハムに至る6代目以降の系図はこの2度目のセムの系図に出てきます。つまり「バベルの塔」の物語は2つのセムの系図に挟まれているのです。

さて「バベルの塔」の事件とは——すでにペンテコステ礼拝でも先週の詩編126編でも触れましたように——人間が一つの言語であったため、その言語によって人間は容易に自分たちの総意をまとめ、その総意に悪意がはらみ、神をも恐れぬ「人間の偉大な業」を誇示する文化的傲慢に向かって行きます。創世記にはこう書かれています。「11:4 彼らは、『さあ、天まで届く塔のある町を建て、有名になろう。そして、全地に散らされることのないようにしよう』

と言った。」神はこれを見て、人間の言葉を混乱させ、一つの言語を多くの言葉へと多言語化して、その言葉の混乱によって、人間の意思疎通を分断し、人間の文化的傲慢を砕かれます。バベルとは——先週も申しましたように——ヘブライ語でバビロンのこと、この物語にはバビロン文明への批判が含まれているのです。新バビロニア帝国（超大国）が出現し、自国の言語を世界言語として言語統一し、世界を我が物にしようとする支配の欲望・文化的傲慢を神が打たれる。それにより内部崩壊するという物語です。先ほどの箇所を「新改訳聖書」（改訂第3版）で見ておきましょう。「創11:4 そのうちに彼らは言うようになった。「さあ、われわれは町を建て、頂が天に届く塔を建て、名（セム）をあげよう。」新共同訳の「有名



ウルのジグラット

になろう」という翻訳より「**名をあげよう**」と直訳を大切にしたいと思います。

そしてこのバベル（バビロン）の傲慢が打ち砕かれた後、セムの系図（②）が再登場するのです。今度は、

- | | |
|-----------|-----------|
| ① セム | 系図② |
| ② アルパグシャド | |
| ③ シェラ | |
| ④ エベル | |
| ⑤ ペレグ | |
| ⑥ レウ | |
| ⑦ セレグ | |
| ⑧ ナホル | |
| ⑨ テラ | |
| | ├─ ⑩ アブラム |
| | ├─ ナホル |
| | └─ ハラン |

セムから5代目のペレグで終わらず、6代、7代、8代と続いて9代目アブラ（ハ）ムの父テラを経て、10代目のアブラ（ハ）ムに至る系図が示されます（11:10-26）。

「創11:10 セムの系図は次のとおりである。セムが百歳になったとき、アルパクシャドが生まれた。それは洪水の二年後のことであった。11:11 セムは、アルパクシャドが生まれた後五百年生きて、息子や娘をもうけた。11:12 アルパクシャドが三十五歳になったとき、シェラが生まれた。11:13 アルパクシャドは、シェラが生まれ

た後四百三年生きて、息子や娘をもうけた。11:14 シェラが三十歳になったとき、エベルが生まれた。11:15 シェラは、エベルが生まれた後四百三年生きて、息子や娘をもうけた。11:16 エベルが三十四歳になったとき、ペレグが生まれた。11:17 エベルは、ペレグが生まれた後四百三十年生きて、息子や娘をもうけた。11:18 ペレグが三十歳になったとき、レウが生まれた。11:19 ペレグは、レウが生まれた後二百九年生きて、息子や娘をもうけた。11:20 レウが三十二歳になったとき、セルグが生まれた。11:21 レウは、セルグが生まれた後二百七年生きて、息子や娘をもうけた。11:22 セルグが三十歳になったとき、ナホルが生まれた。11:23 セルグは、ナホルが生まれた後二百年生きて、息子や娘をもうけた。11:24 ナホルが二十九歳になったとき、テラが生まれた。11:25 ナホルは、テラが生まれた後百十九年生きて、息子や娘をもうけた。11:26 テラが七十歳になったとき、アブラム、ナホル、ハランが生まれた。

このセムからテラ（アブラムの父）を経てアブラムに至る系図

(②)を10章(21-31節)の拡散的な系図(①)と比較すると、この11章(10-26節)の系図(②)は、一代に一人ずつ、アブラ(ハ)ムに直線的につながる選びの系図——つまり直系の系図——であることが分かります。神は人を選び、その系図の細い線を通して神の御業(救い)が実現していくです。



先ほど申しましたように、2つの「セムの系図」の間に「バベルの塔の物語」が挟まれています。これには理由があります。実はセム族の「セム」は、名を上げるといふ際の「名」「名前」と同じ単語(ヘブライ語で「セム」שֵׁם)なのです。10章に最初のセムの系図が出てきて、その後に「町を建て、頂が天に届く塔を建て、名(セム)をあげよう」(11:4)とする「バベルの塔の物語」を挟んで、11章で再びセムの系図が出てくるといふ構造は、富と権力をもって世界の歴史に自分たちの「名」を残そうとした、いや、永遠に世界を支配しようとしたバビロンの人々

の野望を打ち砕き、真に「^{セム}名」を上げ、「^{セム}名」を残す人物の、出発を準備するのです。こうしてアブラハムを通して本当の名（セム）を上げる物語が語られることになるのです。

実際、残っている名は、バビロンの名ではありません。セム族の10代目に生まれたアブラ(ハ)ム、彼の名が残るのです。またその名はアブラハム自身の名前であるだけでなく、リンカーンをはじめ世界の多くの人々の愛する名前となって後世に残りました。神さまはアブラ(ハ)ムに対して、こうおっしゃっていました。12章2節。「12:2 わたしはあなたを大いなる国民にし／あなたを祝福し、^{セム}あなたの名を高める／祝福の源となるように。」その半生を神の導



きに従って移動を続けた1人の老人、どこにでもいる半遊牧民の老人こそが、その後の数千年の歴史に決定的な影響を及ぼした人物であり、権力も富も何も持たないこの老人こそ、世界に名をなすようになったのです。

さて2つのセムの系図からもう一つ学んでおきたいとおもいます。再度、比較してみましょう。第1のセムの系図は「生まれた」という言葉が特徴です。創世記9章1節の「創9:1 神はノアと彼の息子たちを祝福して言われた。『産めよ、増えよ、地に満ちよ』」という命令の実現として、ノアの息子たちのそれぞれの系図が示されました。ヤフェトの子孫たちの系図、そしてハムの子孫の系図が示され、さらにセムの子孫の系図が示されます。いずれも「産めよ、増えよ、地に満ちよ」という神の命じられたとおりに、全地にノアとその息子たちの子孫が増え広がっていきます。

しかし第2のセムの系図は、アブラハムに向かって子孫たちの名前を列挙した後、一呼吸おいて、27節。「テラの系図は次のとおりである」と、アブラ(ハ)ムの父

テラ	
├	アブラム(妻サライ=不妊の女)
├	ナホル(妻ミルカ)
└	ハラン—ミルカ、イスカ、ロト (ハランはウルでテラより先に死去)

であるテラの家系図に焦点が当て直され、「**テラにはアブラム、ナホル、ハランが生まれた。ハランにはロトが生まれた**」と続きます。しかしこのテラの系図は「死」で終わるのが特徴です。続く28節。「**11:28 ハランは父のテラより先に、故郷カルデアのウルで死んだ。**」アブラ(ハ)ムの弟ハランは生まれ故郷のウルで死にます。そして父親のテラはウルを離れます。31節。「**11:31 テラは、息子アブラムと、ハランの息子で自分の孫であるロト、および息子アブラムの妻で自分の嫁であるサライを連れて、カルデアのウルを出発し、カナン地方に向かった。彼らはハランまで来ると、そこにとどまった。**」子どもの1人に死なれた老人のテラ。さらに30節。「**11:30 サライは不妊の女で、子供ができなかった。**」子どもが生まれないアブラ(ハ)ムとサライという名の夫婦。父親ハランを亡くした独身のロト。残されたのは中年から老年になりつつある子どものいない夫

婦と独身の青年と老人のテラ。一同は住み慣れたウルを離れます。ユーフラテス川にそって北上し、バビロンを通過して約1000キロの道のりを行います。テラがウルを出発したのは息子ハランを失った失意の故だったのかも知れません——彼は、「**カナン地方に向かっ**」て出発したはずなのに、亡くした息子と同じ名前を持つ土地ハラン(חָרָן)にやって来ると、そこにとどまってしまうのです。しかしほどなくテラも、この地で死去してしまいます。32節。「**11:32 テラは二百五年の生涯を終えて、ハランで死んだ。**」

この一族の未来は開かれていない、閉ざされているのです。この系図は続きようがない。神さまが選んだ家系、それがこういう結末を迎えるものなののでしょうか。それは、何を意味するのでしょうか。今日の課題はそこにあります。新しい命を生み出すことが出来ない



ところまで行き着いてしまった家族。しかし神の言葉が事態を開きます。世界は「光あれ」という神さまの言葉で始まったのです。死と行き止まりに立ち至った世界に、新しい出来事を起こすのもまた、神さまの言葉なのです。アブラハムに対する言葉によって、神さまは新しい世界、新しい歴史を作り出そうとされるのです。12章1節。「12:1 主はアブラムに言われた。「あなたは生まれ故郷(ウル)／父の家(ハラン)を離れて／わたしが示す地に行きなさい。」「示す地に行く」か「行かないか」に、神さまによる新しい創造、新しい歴史が始まるかがかかっているのです。アブラハムがこの言葉にしたがって未知なる土地に旅立つならば、彼自身が祝福されるだけでなく「地上の氏族はすべて…祝福に入る」(v.3)道が開けるのです。一切を神さまに委ねて、服従する信仰を生きる人間が誕生するか否か。呪いと死に覆われた人間と世界に対する祝福が回復するかがかかっているの



い出来事を起こすのもまた、神さまの言葉なのです。アブラハムに対する言葉によ

って、神さまは新しい世界、新しい歴史を作り出そうとされるのです。12章1節。「12:1 主はアブラムに言われた。「あなたは生まれ故郷(ウル)／父の家(ハラン)を離れて／わたしが示す地に行きなさい。」「示す地に行く」か「行かないか」に、神さまによる新しい創造、新しい歴史が始まるかがかかっているのです。アブラハムがこの言葉にしたがって未知なる土地に旅立つならば、彼自身が祝福されるだけでなく「地上の氏族はすべて…祝福に入る」(v.3)道が開けるのです。一切を神さまに委ねて、服従する信仰を生きる人間が誕生するか否か。呪いと死に覆われた人間と世界に対する祝福が回復するかがかかっているの

です。超高齢化社会と呼ばれる時代に生きる教会の成長もここにかかっているのです。教会は牧師の小手先の操作や、美辞麗句に満ちた祈りや説教で成長するものではないのです。牧師と信徒の神への服従が教会の生命線なのです。若くてもお年を召していても。

神の言葉に従ったアブラハムの行動を、新約聖書のヘブライ人の手紙はこう記しています。11章8節。「11:8 信仰によって、アブラハムは、自分が財産として受け継ぐことになる土地に出て行くように召し出されると、これに服従し、行き先も知らずに出発したのです。」アブラハムは行き先も知らずに出発したのです。行き先が分からないけれども立ち上がらなければならない時、そんな出発の時もあるのです。目的はいまだ不明瞭だけれども、実行しなければならない務めもあるのです。確かなのは神の導きだけです。その導きに対する心のうなずきだけです。

わたしたちの新しい1週間の旅が始まります。祈りましょう。

2020.7.5日 本基督教団千歳丘教会創立記念礼拝